



市場の変容から見る移行期のインド

慶應義塾大学経済学部教授 神田 さやこ

有名なガーンディーの「塩の行進」は、塩がインドにとってイギリス植民地支配の象徴であることを示した。イギリス東インド会社統治時代から一貫して、塩は英領インドの多くの地域で主要財源の一つとして自由な生産と販売が阻害され、地域によっては在来製塩業がイギリス近代製塩業との不当な競争にさらされ、衰退したからである。そのため、これまでの研究では塩のもつ政治性が強調されることが多く、それを生産し、売買し、消費するインドの人々の姿は、「強大な」統治者やイギリス産業資本の陰に隠れた受動的な存在でしかなかった。

しかしながら、統治機関としてのイギリス東インド会社が残した膨大な塩専売関連文書を実際に読むと、行政官やイギリス商人が市場の動向やインド商人の行動などに翻弄される様子にしばしば遭遇する。そうした事情から政策が見直されたり、時には廃止されたりすることもある。つまり、植民地統治下とはいえ、インド社会・経済の変容は統治者が実施する諸政策によって一方的にもたらされるものではなく、そうした諸政策も現地の社会・経済の内的変化に規定されていたことを、史資料は雄弁に語っているのである。

本書は 18 世紀後半から約 1 世紀にわたるイギリス東インド会社統治期の東部インドを対象として、イギリス東インド会社の主要財源の一つである塩の専売政策と市場との関係、その変容について検討した。イギリス東インド会社は、収益を最大化すべく価格を統制しようとしたが、塩市場の自律的な動きによって価格が変動し、政策を放棄せざるをえなくなった。塩市場は、生産方法によって異なる塩の種類が存在、人々の嗜好、生産を取り巻く環境変化、塩商家の経営、新たな法制度の整備、インド沿岸貿易など多様な要因によって変化し、政策もそうした変化から自由ではなかった。本書は、これらがイギリスのインド統治の方向性、インドの「近代」への移行を議論する上でもきわめて重要な変化だったことを明らかにしている。

日本における質の高いインド経済史研究の積み重ねがあったからこそ、本書の執筆が可能になった。本賞の受賞が、インド経済史研究の進展に資するならば、私にとって望外の喜びである。

かんだ さやこ

94 年慶応大卒、05 年ロンドン大より P h. D (歴史学) 取得。大阪大講師、慶応大准教授などを経て、13 年より慶応義塾大学経済学部教授。70 年生まれ。

